

## ルーマニアの言語地図について

田 中 春 美

ルーマニア言語地図の歴史は、1884年にルーマニア・アカデミーが企画した *Etymologium magnum Romaniae* のために、B. Petriceicu - Hasdeu が通信によるアンケートを試みたのに始まる。これは、主として音声学上の質問206から成る大がかりなものだったが、1898年に中断されて、十分な成果を挙げるまでにはいたらなかった。

次に、ドイツのライプツヒの言語学者G. Weigand が、3人の弟子の助けを借りて、1895年から10年近くの歳月を費してルーマニアの各地を訪問、総計752地点で114語から成る質問を調査した。その成果の集大成は、1909年に *Linguistischer Atlas des daco-rumänischen Sprachgebietes* としてライプツヒで刊行されたが、幾人もの学者が指摘したように、調査地点と情報提供者 (informant) の選択が恣意的であり、粗雑な調査と言わざるをえないところがあって、十分に信頼の置ける資料ではない。しかし、この言語地図はロマン諸語に関するかぎり、Gillieronにつぐ最古のものであり、とくにこの国において大きな影響を残した。

Weigandの弟子の一人であった Sextil Pușcariu は、Sever Pop や Ștefan Pașcu などと共に作った質問書に従って、1922年から1931年にかけて通信アンケートを試み、その結果を *Atlasul Linguistical României* として1939年クルジュ大学から出版した。そのほかにも、Pop や Pașcu が雑誌論文の形で資料の一部を発表している。質問書は(1)馬、(2)家、(3)つむぎ糸、(4)地名、(5)その他の農民生活用語の5範疇から成っていた。このアンケートの経験は、次の本格的な言語調査への準備となり、資料の上からも大きな貢献をしたと考えられる。

これと一部重なり合って、ルーマニア王室とアカデミーの後援による大規模な方言調査が計画された。それまでの実績が認められて、Pușcariu が中心となって理論的な指導を行ない、Pop とクルジュ大学の Emil Petrovici が実地調査を担当した。質問書は平行的に2種類が作られ、小質問書が2208、大質問書が4800の質問から成る。Pop がルーマニア全土で301の地点を訪問、小質問書に従って各地点で1人ずつの情報提供者に質問し、Petrovici が86地点を訪問、大質問書に従って各地点で質問の部門別に数人の情報提供者に質問した。調査地点の選択は、前者ではそれぞれの間隔が35キロ、後者では100キロになるように考慮され、人口400人以上の町村が対象になっている。

以上のような要領で1928年ごろから開始された実地調査が、だいたい1938年に終了し、その大半は *Atlasul Linguistic Român* (以下ALR) および *Micul Atlas Linguistic Român* (以下MALR) として公表された。Pop の小質問書によるものが、ALR第1部として2巻(I:クルジュ, 1938; II:シビウ=ライプツヒ, 1940)、MALR第1部として2巻(I:クルジュ, 1938; II:シビウ=ライプツヒ, 1942)、Petroviciの大質問書によるものが、ALR第2部として1巻(シビウ=ライプツヒ, 1940)、MALR第2部として1巻(シビウ=ライプツヒ, 1940)出版された。

それ以後、第2次世界によって中断されていたこの仕事が、およそ10年ぶりに再開され

ることになったが、その時には Pop はベルギーに亡命、Puscariu はすでに亡き人となっており、結局クルジュに残った Petrovici がその編集主幹の任にあたった。かくして ALR の新シリーズ(第2部とも言う)が、つぎつぎと出版されることになる。1956年の1巻と2巻、それに1961年の3巻は、従来どおり語彙を中心としたもの、1965年の4巻と1966年の5巻は、しだいに語句や文にまで及び、1969年の6巻はやはり句・節が中心だが、その中の品詞を項目として扱っているのが特色である。次の7巻が最終巻のようだが、まだ未刊である。MALRのほうも、新シリーズ(やはり第2部とも言う)が出されつつあるが、これまでのところ1956年の1巻と、1957年の2巻と3巻までである。ただし、MALRのほうが1冊の収容枚数が多く、ALRは1枚の地図に単語1個の分布が示されているのに対し、MALRのほうは、語の分布によって色分けされた地図が、1ページに4枚も含まれているところから、予想される出版はあと1冊あるかなし、というところであろう。出版は、いずれもブカレストの国立アカデミ-出版局からである。

むしろ最近注目されるのは、GilliéronとEdmontの地図が、後にフランス各地の詳細な方言地図で補足されたように、ルーマニア各地方の方言地図が、つぎつぎと現われつつあることである。その先駆けは、Boris Cazacu によるオルテニア(Oltenia)地方の言語地図である。これまでのところ、1巻が1967年、2巻が1970年に刊行されており、その先の予定は不明である。つづいて、北部のマルムレシュ(Marmureş)地方の言語地図が1巻、1969年に出版されている。計画書によれば、上記のオルテニア地方と、首都ブカレストを含むムンテニア(Muntenia)地方など、国の南部や南東部は、ブカレストにある音声学・方言研究センター(Centrul de Cercetări Fonetice și Dialectale)が中心となって調査を行ない、北東部のモルドバ(Moldova)地方の調査は、ヤッシ-にある言語学・文学史・民俗学センター(Centrul de Lingvistică, Istorie Literară și Folclor)が中心、残る北部や西部の諸地方—トランシルバニア(Transilvania)、上記のマルムレシュ、クリシャ-ナ(Crișana)、バナト(Banat)—の調査は、クルジュにある言語学・文学史研究所(Institut de Lingvistică și Istorie Literară)が中心となって行なうそうである。今後の調査結果の発表が楽しみである。

なお、戦前のルーマニア言語地図についての詳細は、方言研究会(広島大学文学部国語研究室)編『方言研究年報』第3巻(1960年)pp.95-99を、戦後についてはB. Cazacu, Studii de dialectologie română (1966)を参照されたい。

(東京教育大学助教授)